主日礼拝説教要旨　　　　　　　　　　　　　　　　　　2014年３月９日

**「父よ、彼らをおゆるしください。」**

新約聖書ルカによる福音書第２３章２６－４９節

総督[ピラト](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9D%E3%83%B3%E3%83%86%E3%82%A3%E3%82%A6%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%83%94%E3%83%A9%E3%83%88%E3%82%A5%E3%82%B9" \o "ポンティウス・ピラトゥス)の官邸から[ゴルゴダの丘](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B4%E3%83%AB%E3%82%B4%E3%83%80%E3%81%AE%E4%B8%98)まで続く「苦難の道」(Via Dolorosaヴィア・ドドローサ）。主イエスは倒れられ、クレネ人シモンが十字架を負います。ふたりの犯罪人と、民衆と悲しみ嘆いてやまない女たちの群れが、イエスに従いました。

「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。十字架から聞こえる主イエスの声。それはとりなしの祈りです。全知全能の父なる神への懇願です。罪を裁くことのできる唯一のお方に、彼らをお赦しくださいと祈られています。わたしたちは自分の罪の償いを行うことはできません。また罪人が他人の罪をつぐなうこともできません。罪のない神のひとり子が人となられた主イエスだけが、神の厳しい裁きを代わって受けることができます。その方がご自分を犠牲にされつつ神に祈られています。

「彼らをおゆるしください。」主イエスのこの祈りによって、罪がゆるされ、神とわたしたちとの和解・救いが実現します。生きてゆくために必要なのは、わたしたちを肯定する赦しです。裁かれることは、否定されることです。周囲の人を裁くことも否定することです。人は心の深いところで、自分で自分を否定しています。否定されて立ち直れる人はいません。失敗して、原因を追究され、ダメな人間とレッテルを貼られたら、もう頑張っても立ち直れないのです。どうせ罪人、そのどこが悪いと居直って生きるしかない。しかし、主イエスの赦しがここにあります。この主の十字架の祈りが、立ち直らせるのです。

「彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。彼らはわたしが救い主だと分からずに十字架に着けているのです、と祈ります。赦しの根拠を、このように見出してくださっています。ここに二人の犯罪人が登場します。悪口を言い続ける人と、それをたしなめる人。「おまえは神を恐れないのか。お互いは自分のやった事の報いを受けているのだから、こうなったのは当然だ。」人生の最後には、一生の間で犯してきた罪の裁きがあります。わたしたちもこの犯罪人と同じ立場です。「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」。 十字架につけられ死ぬ瀬戸際の中で、主イエスにおすがりしました。聖霊が働かれたのだと思います。主イエスはすがって来る者に言われます。「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいる」。彼は平安の中で十字架刑を受けました。主イエス・キリストと共に死んだ最初の人です。

ディボーションノート　１０　　2014年３月１０日―３月１５日

|  |
| --- |
| ３月１０日(月)　詩篇１３５篇  　「主をほめたたえよ、主のみ名をほめたたえよ。主のしもべたちよ、ほめたたえよ。」冒頭から繰り返し「さあ、主を賛美しよう。」と呼びかけています。教会の集いは賛美から始まります。二人または三人が、主イエスの名によって集まるところには、主もまた共におられます(マタイ18：20)。それが罪を犯した人と犯された人との和解の集いであるならば、なおさらです。罪を赦しあう場所に主は共におられます。賛美がふさわしくない場所はどこにもありません。神は世界中でいつも生きて働かれ、人を選び、救い出され、解放して自由にされ、新しい場所を与えて下さいます。わたしたちがこの地上で生きてゆけるように、今日も働いて下さっています。ですから神を賛美し、あらゆるところで、神をほめたたえましょう。いま、この時に、思い出される賛美を、主に賛美してください。 |
| ３月１１日(火)　詩篇１３６篇  聖歌隊が1節の前半を歌いながら呼びかけます。すると礼拝に集った会衆が口をそろえて、「その慈しみは永久に絶えることがない」と応えるのです。このように26回繰り返します。そうして、旧約聖書のイスラエルの民の歴史を貫いて、真実に、変わりなく、まさに神は慈しみをもって永遠に自分たちを愛しぬいて下さったことを、その礼拝に集った全員で賛美するのです。詩篇の中でも、１０５篇、１０６篇、１０７篇、１１８篇、そして１３６篇の冒頭に歌われています。  「主に感謝せよ、主は恵み深く、その慈しみは永久に絶えることがない。」という賛美は、誰から歌いだされたのでしょうか。それをたどってみると、ダビデ、ソロモン、エレミヤ、エズラ、という賛美の歴史がたどれます。これについての説教は別に印刷して会堂後方のラックに入れてあります。「主」とは旧約聖書では「神」をさしますが、わたしたちにとっては主イエス・キリストです。主イエス・キリストに感謝すること、主イエス・キリストが恵み深いこと、主イエス・キリストの慈しみが永遠であることを、静かに黙想しましょう。 |
| ３月１２日(水)　詩篇１３７篇  バビロン捕囚という悲しい歴史の中で歌われた歌です。故郷を思い出し、捕虜として生活する悲しみを耐えている彼らに、バビロン人が、お前たちの故郷シオンの歌を一曲歌えと求めるのです。どうして神を讃える賛美を、神を信じない人々の求めに応じて、まるで宴会の余興のように賛美できるでしょうか。ここに詩人の苦悩が歌われています。後半の過激なまでの復讐の祈りは、敵を愛せよと教えられた主イエス・キリストの教えとは反対のものですが、その根底には、彼らが受けた屈辱の深さがあると思われます。 |
| ３月１３(木)　詩篇１３８篇  　感謝すること、賛美すること、礼拝すること、祈ること。その一つ一つが、信仰生活にあって、魂に力を増し加えられることだと、わたしたちは知っています。そこでいつも思うことは、6節です。神は至高のお方です。これ以上高くおられる方はいません。その高くいらせられるお方が、み心をかけてくださるのは、低い者に対してです。神の前にへりくだり、心からの謙遜に生きようとする人です。謙遜とは何か、主イエス・キリストが生きられた姿から、たどりなおしてみましょう。ピリピ２章６－１１節を「キリスト讃歌」として初代教会は賛美しました。　また初代教会が、主イエス・キリストの謙遜をうけて、どのように生きようとしたかを、ペテロ第一の手紙５章からたどってみましょう。(詳しくは木曜祈祷会でもお話します。) |
| ３月１４日(金)　詩篇１３９篇  　深い内容の詩篇です。神に知られている、知り尽くされていると歌いだします。行住坐臥(ぎょうじゅうざが)、全てを知られているといわれて、どう感じられるでしょうか。ただ８節まで読み進めると、死んで陰府(よみ)にまでくだり床を設けて寝かされている、そこにも神は共におられるとあります。使徒信条の言葉に通じます。主イエス・キリストが死んで黄泉(よみ)に下られ、そこにもおられ、そこから復活(よみがえり)されたことは、わたしたちの死の恐れを根本的に吹き払います。死の闇が復活の光で消え去るからです。18節は、目覚めて気が付くと、そこに主イエスがいて下さる恵みです。全身麻酔の手術の後や、毎朝、毎夜のことです。先週の朝、私は床の中で目が覚め、一つの祈りが心に迫ってきました。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは何をしているのか分からずにいるのです。」私が寝ている間、それは短い死を体験することです。そこで目が覚めてなお、わたしたちの愛する主イエスは、私のそばで、この祈りをお祈りして下さっていたのかと知ると、今日もゆるされて生きられることの感謝に満たされました。信仰とは神に心を開き23－24節の祈りをささげることではないでしょうか。 |
| ３月１５日(土)　詩篇１４０篇  　「悪しき人々から助け出し、乱暴な人々から逃れさせて下さい。」最近の路上では、高齢者や弱い立場の女性や子どもに対して、誰でもいいから殴り奪い暴走するという、全く自己中心的な事件が起こっています。お互いが注意しあい、また弱い立場の人を見守っていかなければならない時代です。ダビデも厳しい人生を歩みました。最初は先代のサウル王に追われて逃亡し、王位についた後は、自分の蒔いた種が原因でアブサロムに追われて逃げ回りました。6節からの祈りは、後半が徹底した復讐の祈りとなります。10節の「燃える炭を彼らの上に落として」は、ローマ書12章20節では、敵が飢えたら食物を与え、渇いたら飲ませることで、悪に対して善をもって向きあう文脈の中で語られています。復讐は神のなさることです。主イエスに赦されているわたしたちは、ゆるしに生きるように導かれています。 |